



TITLE:

鎖國以後に於ける南方への關心

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 鎖國以後に於ける南方への關心. 經濟論叢 1942, 54(5): 475-487

ISSUE DATE:

1942-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/131678>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第 卷四十五第

月五年七十和昭

論叢

鎖國以後に於ける南方への關心……………經濟學博士 本庄榮治郎

佛印に於ける信用對策に就いて……………經濟學博士 松岡孝兒

新經濟論理……………經濟學博士 柴田敬

經濟生活の發達と經濟政策……………經濟學士 堀江保藏

研究

テュルゴの社會進歩の理論……………經濟學士 出口勇藏

ジュースミルヒの人口學觀……………經濟學士 青盛和雄

北支農業と灌漑……………經濟學士 山崎武雄

說苑

統制經濟と保險……………經濟學博士 小島昌太郎

稅制改革後の租稅統計……………經濟學博士 汐見三郎

附錄

彙報

經濟論叢

第五十四卷 第五號

（通稱）第百貳拾壹號

昭和十七年五月發行

論

叢

鎖國以後に於ける南方への關心

本庄榮治郎

一 鎖國と海外事情の研究

江戸時代の對外關係については一般に鎖國の語を以て示されてゐる處であり、當時我國人の中にも西洋を夷狄の國として斥けた者も少くなかつたが、中期以後西洋事情の研究が行はれ、時代の降るに従つて西洋文化再認識の必要に迫られて來た。即ち西川如見は既に早く元祿年中に「華夷通商考」を著はして海外の形勢を述べ、正徳年中新井白石は蘭人につき各國の事情を聞き「采覽異言」や「西洋紀聞」を著はした。殊に八代將軍吉宗は蘭書閱讀の禁を解き、宗教書以外の洋書を讀むことを許し、青木昆陽・野呂元丈等に蘭書の講究を命じ、昆陽等は毎年江戸に參觀する和蘭の甲比丹について蘭語を學び、又長崎に赴いて語學を修め、その結果、昆陽は「和蘭話譯」「和蘭文字略考」を著はし、元丈は「和蘭本草和解」を述作した。之れより以後蘭學は次第に發達し、語學として

鎖國以後に於ける南方への關心

第五十四卷

四七五

第五號

一

の蘭學が研究されたばかりでなく、蘭語を通して化學・醫學・曆學・天文學・兵學其他の諸科學が我國に傳へられ、且蘭學者の經濟思想として注意すべきものもあらはるに至つた。

更に露西亞勢力の南下は千島樺太の方面に於て日露兩國の接觸となるに至つたから、明和安永の頃に於て識者の注意は蝦夷地に集注し、之が開發經營を論ずる者屢現はるゝ有様であつた。工藤平助の「赤蝦夷風説考」は開國論の濫觴とも稱すべきものであり、之に動かされて幕府は天明五・六年に蝦夷・樺太調査を行ふに至つたのである。寛政年間に著はされた本多利明の「西域物語」や「經世秘策」は外國貿易によつて國富を増進することを根本問題とし、蝦夷の開發のみならず北方の經略をも説いたもので、積極的進取發展の方針を示したものである。佐藤信淵の著書には北方及南方發展のことが説かれてをり、その他の人の著書に於ても同様の趣旨が述べられてゐるものがある。また本居宣長が安永七年に著はせし「馭戎愷言」は我國上古以來の對外發展の歴史を敍したものであつて、この光輝ある國史の成績を回顧して鎖國の實狀に不滿の意を寄せたものである稱とせられて居る。

かくの如くにして、或は西洋文化の再認識或は國史の回顧によつて、識者は漸く鎖國の非を説き開國進取の精神を鼓吹したものであるが、幕末に及んで西洋事情の研究は更に一層の進歩を遂げ、開國貿易の思想は次第に普及したのみならず、我國も亦須く西洋に學ぶ所なかる可らずとの考を生ずるに至つた。即ち嘉永六年八月の海防掛の勘定奉行同吟味役等の上申書¹⁾、同年十月の高島喜平の上書²⁾、安政五年三月梁川星巖に贈れる佐久間象山の書簡³⁾等にも西洋の學術を學ぶべきことが説かれてをり、知識を世界に求めんとする思想は既に幕末に於ても存したところであつた。

以上説く所によつて明かなる如く、鎖國とはいひながら、當時海外文化は長崎の一角を通じて我國に入り來り、

1) 大日本古文書・幕末外國關係文書之一、21頁。
2) 日本經濟叢書、第三二卷、477頁。
3) 象山全集、第五卷、9頁。

幕末には開國に進展したが、その間に於て、北邊に於ては種々なる事件が起り、南方に對する關心も少からず存したのである。北邊に於ける事件特に蝦夷開發については別稿の參照を乞ふこととし、本稿に於ては主として鎖國以後における南方に對する我國朝野人士の關心を述べたいと思ふ。尤これが系統的なる研究は他日に譲り、茲には私の心付きし二三の事例について之を述ぶるの外なき次第であるが、それによつても鎖國以後に於いて南方への關心の存したことは明かにし得ると思ふ。

二 南方に對する知識

當時南方に關する知識は、いふ迄もなく支那書を通し、又は來朝の蘭人により或は支那商人によつて傳へられたものであるが、今その一・二を示さば次の如くである。

(イ) 先づ第一に擧ぐべきは西川如見(慶安元—享保九)である。如見は長崎の人、寛文十二年京都の儒者南部艸齋の長崎に來遊するや、之に就て學び、又小林謙貞・向井元升等について天文・曆數を學び、當時としては東西の學を修めた學者で、後に將軍吉宗の下問にも應へてゐる。元祿年間に「華夷通商考」を著した。華は支那、夷は夷狄の意で支那及同國に通商せる諸外國を指したものである。同書には船舶・人物等の圖を示し、中華十五省之略圖があり、また地球萬國一覽之圖があつて、極めて粗雑ではあるが世界地圖が掲げられてゐる。表紙(増補)の見返に『支那天竺輿道程十產人倫於風俗』とあり、その内容を察するに足る。卷一及二は中華十五省、卷三及四は外國・外夷、卷五は外夷増附錄、海中異魚海獸となつてゐる。從て支那各省はもとよりアジア南洋諸國の國名が多く列擧せられ、歐洲諸國・アフリカ・アメリカ等にも及んでゐる。右に所謂外國は朝鮮・琉球・大宛(臺灣・東寧)・塔伽沙谷(

4) 拙著、近世の經濟思想、續篇、53—72頁。
1) 内田秀雄、西川如見と其の地理學、史林第二四卷一號に略傳がある。
2) 日本經濟叢書、第五卷、日本經濟大典第四卷所收。

交趾・東京を挙げ、これ等の國は『唐土の外なりと云とも、中華の命に従ひ、中華の文字を用、三教通達の國也』とし、外夷として占城・柬埔寨・太泥・六甲・暹羅・母羅伽・滿刺加・麻六甲・莫臥爾・咬囉吧(ジャガタラ)・爪哇・番旦・阿蘭陀を挙げ、これ等の國は唐土と異り皆横文字の國なりとしてゐる。尙阿蘭陀人の通商せる國は三十五ヶ國ありとして之を列舉してゐるが、その中にはソモンダラ(蘇門答刺・スマタラ)・ベグウ(舊牛)・テイモウル・セイロン・ボルネラ(渤泥國)等の名も見えてゐる。猶附録としてサントメ(聖多點)・インデヤ(印度亞)・ラ宇(羅宇)・チャ宇・ゴワ(哥羅)・パタン(巴旦)・マロク(馬路古)・カフリ等を挙げ、御禁制の國即ち日本渡海停止の國として亞媽港・呂宋・イスハニヤ・エゲレスを挙げてゐる。而して此等の各地名の條下に日本よりの海上里程・產物・政治關係・風俗等が記されてゐる。

(口) 新井白石 白石は正徳年間に蘭人につき各國の事情を聞き「采覽異言」や「西洋紀聞」を著はした。

「采覽異言」は歐羅巴・アフリカ・アジア・南アメリカ・北アメリカの五卷より成り、東西各國の地理の明かにしたもので、吾邦に於て編述された萬國地誌の初めであるといはれてゐる。正徳三年の自序がある。アジアに關する記述が最も詳しく、其處に擧げられてゐる國名は三十に達してゐる。その内には現在の大東亞共榮圈として知られてゐる地方の地名が多く掲げられ、その產物・所屬等が説明せられてゐる。例へばインデヤ(應帝亞)・ゴア(臥亞)・コチン(各正)・セイラン(齋狼島・錫狼島)・ベンガラ(榜葛刺)・ベグウ(舊牛)・スイヤム(暹羅)・マロカ(滿刺加・麻六甲)・スマアタラ(沙馬太刺)・ボルチヨ(波耳匿何・渤泥)・ジャワ(爪哇・閩婆・咬囉吧・交留巴)・セレベス(食力百私)・マロク(馬路古)・ロソン(呂宋)・マカラ(阿馬港)等はその一斑である。

「西洋紀聞」は三卷より成り、上卷は奉行所にて羅馬人を召對糾問せることを記し、中卷は羅馬人の語りし海外

3) 新井白石全集、第四卷に收む。

4) 同上、第四卷に收む。

諸國の地理歴史などを記し、下巻は羅馬人と問答せし雑話特に天主教の妄を論駁せしものである。上巻末尾に正徳五年とあるからその頃の著作と見るべきであらう。中巻には東洋南洋に關する各地名があらはれてゐる。

白石には更に「五事略」の著がある。之は殊策事略・琉球國事略・外國通信事略・高野山事略・本朝寶貨通事略の五種を編輯したものであるが、何れも當局の下問に應じ又は建議せるものにかゝる。その中の「外國通信事略」は徳川初期より通交せし國々の事が記されてゐる。安南・柬埔寨・呂宋・暹羅・亞媽港・臥亞・太泥・占城・塔伽沙古・田彈等の名が見え、別に中華并に外國土產の項目中にもこれ等南洋各地の物產について記してゐる。

(ハ) 通航一覽 我國と諸外國との通航貿易の事蹟を記せるもので、特に注意すべきものは「通航一覽」である。之は林耀等の編するところに係り、永祿九年より文政八年まで二百六十年間に亙る通交事蹟を各國につき更に條目を分ちて詳記せるもので、三百五十卷より成る。南洋關係の部分は次の如くである。

卷一七一一一七八 安南國の部 卷一七九一一八一 呂宋の部 卷一八二一一八四 阿媽港國附臥亞の部

卷一九一一一九七 南蠻總括の部 卷二六三一二六四 柬埔寨國の部 卷二六五一二六九 暹羅國の部

卷二七〇 炎萊(渤泥)國の部 卷二七一 田彈國巴旦國・摩利伽國の部 卷二七二 爪哇國・萬老高島(摩臘)の部

今安南國について見るに、地名位置を考定し、沿革・風俗・產物を説き、通商并呈書獻物御返簡等、渡海御朱印并御書等、渡海制令官商規則、來簡、漂着漂流、其他が説かれてゐるが、他の國についても大體之に準ずる記述が試みられてをり、通交事情を詳知することが出来る。

(ニ) 以上列舉したところと同様の書物は尙多く存するであらう。例へば御書物奉行近藤守重の「外蕃通書」「安南紀略葉」等もその一例である。即ち前者は安南・暹羅・柬埔寨・占城・太泥・田彈・呂宋・阿媽港等に對する通交文書類を纂輯したものであり、後者は安南について國號及往來、沿革、書翰、風土物產交易その他の事に

5) 同上、第三卷所收。
6) 圖書刊行會本、八冊がある。通航一覽續輯は寫本のまゝで印刷されてゐない。
7) 近藤正齊全集、第一卷所收。

及び雜圖を掲げ、尙「亞媽港紀略」も同様程度のことを記してゐる。なほ鎖國以來長崎出島の和蘭商館より毎年幕府に献上せし「和蘭風説書」が譯出せられ、開國後の文久二年には和蘭本國及蘭領バタビアにて發行せる新聞紙を翻譯して「官版バタビヤ新聞」を刊行し、引つゞき「官板海外新聞」の刊行があり、また或は南支方面にて發行せる漢字新聞の翻刻も行はれた。例へば「官板中外新報」(寧波)、「官板六合叢談」(上海)、「官板香港新聞」(香港)、「官板中外彙誌」(上海)等の如きこれである。

以上述ぶるところの如き事實は、鎖國の時代であつたに拘らず、それ等先覺者が東洋南洋方面に大なる關心を有し、日本の南方に如何なる國々があり、如何なる產物があり、如何なる國が之を領有してゐるかなどといふことを研究したものであつて、海外に對する知識欲に燃えていたことを知ると共に、海外の事情を知ることが當時に於ても必要であつたことを示してゐるものといはなければならぬ。況や開國以後に於てをや。

三 北島見信の大日本洲論

長崎奉行所の天文方北島見信の著はした「紅毛天地二圖發説」は元文年間和蘭より船載せる天體及地球の二圖即ち星圖と地圖とを解説したものであるが、彼はその書中に於て「西洋大洲を建置する外、新に一大洲を僭置する説」を掲げて居る。詳細なる割註があるが、それを省き、本文のみを抄記すれば次の如くである。(原漢文)

「伏して謂るに我が國威擴張り遐邦に揚る。前世香推聖廟、親しく西を征し則ち疆地悉く我が有と爲る。その後野素、秣謁二地歸服せり。延て後世に追んで爪哇・呂宋・臺灣・琉球等の如きに至つて亦然り。倚與陸なる哉。晚近歐羅吧地勢を以て渾地を分ち、大洲の名を建て各國を統領す。謂へらく城中の大地盡せり矣と。其誠實に他邦に超過す。然して頗に罷置沿革有て皆て定録する莫し。此の如くんば則安んぞ得て地勢を盡すと謂んや。猶且その亞細亞の如き南は蘇馬答刺・呂宋等に至り、東は支那日本に至ると謂ふに及んでは、則ち焉ぞ之に從はん。何となれば則ち亞細亞の區域の如きは南麻刺加に至り、東は支那に至り、西

8) 小野秀雄、我邦初期の新聞と其文獻について、(明治文化全集新聞篇解説)
1) 新村出、紅毛天地二圖發説、典籍第二號(大正四年七月)參照。

北二方の如きに至ては、曾より舊に仍らば、則ち斯れ其地勢にして自然最も人の能する所に非るなり。蓋し竊かに推るに、我が本國より越南の蘇馬太刺・和蘭領亞那花、正南那花魏企亞（ニューギニア）等の地に至つては、則ち各地散處すと雖、自ら別に一大洲を成すの地勢有つて、亞細亞の所屬に非ること最分明なり。是によつて敢て新に一大洲を僭置し、稱して以て和兒知斯爺福多（Fortis Yamao）と云ふ者は、其の意特り本國を主として各地を將て之れに屬す。かの三韓・野素・秣鞞の如きは固より皆て亞細亞の所屬たり。然りと雖も皆共に我版圖に附するときは則ち奈何ぞ之を他に爲んや。然らば則ち此洲の屬する所の如きは、西は韓地・秣鞞に至り、北は野素等の處に至り、越南正南の如きは則ち既に上の云々に仍る。而父和兒知斯を以て此大洲の首稱となす者は竊に是を諸國威に取る也。和兒知斯は西士の雅語、此に譯して威德と云ふ」

即ち從來の亞細亞・歐羅巴洲等の諸大洲の外に新に大日本洲を置くべしと論じたもので、日本を中心として北は蝦夷・滿洲から、西は朝鮮、南は琉球・臺灣・呂宋・スマトラ・爪哇・ニューギニア等の南方諸國を包括する一大地域は、亞細亞洲と自ら歴史・地勢・事情を異にするものがあり、わが版圖たるべきものである。仍て之を別の一大洲としてホルチス・ヤマトと命名すべきものであるとして居る。ホルチスは威德の義であるから、之を大日本洲と稱して差支ないであらう。彼こそは大東亞共榮圈の雄大なる理想を二百餘年前に既に道破したものと云ふべきであらう。

四 南方經略論

降つて寛政年間に至つては外國船は屢我が邊海に出沒し、北方に於ては露西亞勢力の南下が問題となつたときであつた。其際工藤平助その他の著書があらはれ、蝦夷開發論・北方經略論・南方進展論等の説かれたことは既に一言した如くであるが、以下南方經略論の二・三を紹介しやう。

(イ) 佐藤信淵　その著「防海策」に於て南方諸邦經略のことを論じて曰く、¹⁾
『八九十年已前よりして諸厄利亞國の兵勢甚以て強盛になりて、イスパニヤ・ポルトガル及拂郎察の諸國も連年數度の合戰に悉

く敗北して、海外の屬國は多くエギリスに奪はれ、阿蘭陀國などは十三年已前に本國は皆エギリスに攻奪はれて、只ジャガタラ等の出張所のみ残りといふ。諸厄利亞國戰勝の勢に乗じて、近來數多の軍船を出して印度亞・ヒリビインセ等の諸州島を亂妨し、發然として東洋諸國を併吞するの志あり。』

とて英吉利の東洋進出を論じ、この勁敵を防禦するの手段としては

『先づ伊豆の七島より船を出して南海中の無人諸島を開發、八丈島等の土地の狭き人の多き地より人を選し植へ、次第に其地を開きて新田耕農の業を起し、又此無人島より船を出して、其南洋の中なるヒリビインセの諸島を開拓し、悉く其地の產物を聚めて清朝・安南・暹羅等の諸國に交易し、ます／＼諸島を経略して琉球國と犄角をなし、不意に舟師を出して呂宋と巴刺臥亞の二國を攻取るべし。此二國は共に氣候溫熱にして物產極めて豐饒なり。悉く是を會衆して以て諸國に交易し、此二國には兵衆を置き武備を嚴にして以て此地を鎮護し、此二國を以て圖南の基礎とし、此地より又船を出して爪哇・渤泥より以南の諸州島を経營し、或は和親を結び以て互市の利を收め、或は舟師を遣して以て其弱きを兼ね、其要害の地には軍卒を置き、武威を張て兵を南洋に輝さば、エギリス人猖獗なりといへども、敢て東洋を窺ふことを得べからざるなり。』

と論じて居る。次に「混同祕策」に論ずる處を見るに、²⁾『萬國は皇國を以て根本とし、皇國は信に萬國の根本なり。』蓋し「皇國より他邦を開くには必ず先づ支那國を吞併するより肇ることなり。(中略)支那の強大を以て猶ほ皇國に敵すること能はず、況や其他の夷狄をや。』故に此書は先づ支那國を取るべきの方略を詳にす。支那既に版圖に入るの上は、其他西域・暹羅・印度亞の國、侏儒腓舌・衣冠詭異の徒、漸々に德を慕ひ威を畏れ、稽顙匍匐して臣僕に隸せざることを得ん哉。故に皇國より世界萬國を混同することは難事に非ざるなり』としてゐる。

(口) 帆足萬里 その著「東瀛夫論」に於て南洋經略説をなして曰く、³⁾

『南蠻とは呂宋をいふ。明季より伊斯波以亞是を押領せり。其島は唐の東南に在て、南ミンタナヲと云ふ島に連りて、其地本邦よりは餘程廣かるべし。(中略)呂宋には金銀以下產物豐饒なれど、伊斯波以亞人採用をしらず。役人兵卒の給金も本國より送るなり。(中略)本邦舟楫・砲術鐵鎖の上は、西諸侯の師六七萬を遣はして是を攻めば、立所に攻取るべし。南ミンタナヲ迄も併せ

2) 同上、中巻、106—107頁。

3) 帆足萬里先生全集、上巻、68—69頁。

たらば日本よりも廣く、南方にて產物豐饒の地なれば、其上にて四五の諸侯を選して是を守らしめ、日本の罪人など數萬人を選じて新日本の地とし、永へ本邦の援國となすべし。是覇王の業といふべし。豐國公の朝鮮を攻め給ひし如く拙きことにあらず。朝鮮は地續きに於て縦へ攻取りても二十萬の兵を置かずしては守りがたし。呂宋は五六萬人の兵を置けば、誰も手指す人はあるまじ。」

(ハ) 其他 吉田松陰も「幽囚錄」に於て琉球を諭し、朝鮮を責め北は滿洲の地を刺き、南は臺灣・呂宋諸島を收め、漸次進取の勢を示すべきを説き、平野國臣は「尊攘英斷錄」に於て、先づ三韓を討ち、更に府を任那に建て、或は渤海の貢せざるを責め、常に商舶を繼して定海(上海)及香港に到りて夷情を探索し、三韓の士兵を驅り加へ、巨艦を跨駛して百蠻を蹂躪し宇内を卷席し、殊方絶域をして普く皇化に浴せしめんと説ける如き、その他同様の南進論は尙他にも存するであらう。

五 西力東漸に關する關心

歐洲勢力の東洋進出は西曆十六世紀以來のことである。これより前マルコ・ポーロの東方見聞錄に刺戟されて葡萄牙・西班牙の二國が航海を獎勵し、西班牙政府保護の下にコロンブスがアメリカ大陸を發見し(一四九二)、葡萄牙人のヴァスコ・ダ・ガマがアフリカの南端喜望峰を迂回して印度に達した(一四九八)のであるが、ついでゴアを略し、マラツカを占めたのは一五一〇・一一一年のこと、マカオに至つたのが一五五七年である。それより前天文十二年(一五四三)にはわが種子島に漂着して鐵砲を傳へてゐる。西班牙人はアメリカ發見後、南アメリカの南岬を回航して太平洋に出で、フィリッピン⁴⁾の呂宋島を略しマニラに政廳を開いて南洋經營の根據地としたのは一五六五・七〇年のことであつた。やがて天正十二年(一五八四)にわが平戸に來た。また蘭人のバタビア占據は一六一九年、英國の東印度會社設立は一六〇〇年、阿片戦争、香港の領有は一八四〇—四二年(天保一一—

4) 吉田松陰全集、第一卷、596頁。
5) 平野國臣傳記及遺稿、99—101頁、遺稿、28—29頁。
1) 近世社會經濟學說大系、高島秋帆集、36頁。
2) 仙臺叢書、第十卷、425頁以下。

三年)である。

かくの如き形勢は長崎における清國商人、和蘭商館の人々を通じて我國にも傳へられ、西力東漸の危機は一部識者の間に異常なる關心を呼んだものである。殊に阿片戦争の我國に與へた衝撃は甚だ大なるものがあつた。かの高島秋帆の天保十一年九月の砲術改善に關する幕府への上書、齋藤竹堂の「鴉片始末」、佐藤信淵の「存華挫狄論」、や佐久間象山の天保十三年十一月の藩主に對する上書の如き、何れもその現はれと見ることが出来る。而も阿片戦争の一年前天保十年に渡邊華山は「慎機論」に於て

『夫唐山(支那)は陸戰に長じ海戰に拙し。其拙によりして是に乘じ、海よりして其首を苦しめ、又陸よりして其背を撲たんと欲す。我國の禍せらるゝは唐山にありては舌亡肺寒の憂なり。(中略)嗚呼天下の理勢乘除相代、物極則缺、盛則衰、古者政教隆盛の地、皆北狄に併せられたり。唐山は固より論せず。佛降生の國、今即ち錫蘭は英吉利斯に據られ、天竺は昔は蒙古兒に併せられ、今は西洋諸國商館となれり。(中略)古の隆盛恃むに足らず、今の無事亦忽にすべからず。夫唯其の人にあるか』と論じ、日本は四面皆海であるから、一旦西洋の賊が來寇するときは甚だ不利なることを指摘し、國防の急務を絶叫した。このことは時勢を洞察するの明あるを見ると共に、如何に當時の人々が、北からも南からも、歐羅巴の力が我國の邊境にひし／＼と押し寄せていることを感じてゐたかを知るべきであらう。

六 出貿易の實現

而も右の力は既にして我國に到來した。嘉永六年六月アメリカ水師提督ペリーは軍艦四隻を率ゐて浦賀に來り、七月には露國のプチアチンがこれ亦軍艦四隻を率ゐて長崎に入港し、アメリカの如きは武力を以てわが開港を迫る有様であつた。翌安政元年三月遂に神奈川條約が締結せられ、これより後歐洲各國とも條約を結ぶことと

3) 佐藤信淵家學全集、下卷、86頁以下。
 4) 象山全集、第二卷、25頁以下。
 5) 華山全集、第一卷、9—10頁。
 1) 拙著、近世の經濟思想、續篇、30頁。

なり、開國貿易の實現を見るに至つたのである。かくて開國の後、政治・軍事・經濟の各方面に互つて從來の傳統政策に反する幾多の新政策が採用せられ、積極的進取的なる意見もあらはれ、識者の間には開國貿易は富國強兵の基なりとの考も起つて來たのである。

長崎に於ける清蘭貿易が一方的の輸入貿易であり、極めて消極的のものであつたことはいふ迄もない。従つて貿易も必要論もあらはれたわけであるが、本多利明や佐藤信淵の如きは早く寛政年間²⁾に於て、我國より外國へ出でて貿易するの利益と必要とを痛論してゐる。殊に古賀侗菴は天保九年に著せる「海防臆測」に於て寛永前の舊制に復して、即ち朱印船制度を復活して、遠く天竺・暹羅・安南等の南方諸邦に往つて貿易を行ひ、以て富國の資となすべきを説き、嘉永六年八月二十九日の彦根藩の上書に於ても、御朱印船を復活してわが商船を和蘭會所・咬囉吧の商館へ遣して交易すべしといへる如き、何れも南方貿易の復活を論じてゐることは注意すべきことであらう。

安政元年の和親條約によつて我國は外國船舶に對して船中缺乏品を供給するといふ所謂缺乏品貿易が行はれたのであるが、それが一般的通商貿易に發展すべきことは必至の狀態であつたから、幕府に於てはその準備として役人を上海香港に遣して貿易狀況を調査せしむべしとの議が起つたが、之は實現を見ず³⁾に了つた。更に、貿易を行ふにしても居貿易は駄目であつて、我より進んで外國へ出掛けて貿易を行ふべきであるとする出貿易の意見が盛んに起り、事實箱館奉行は文久元年に黑龍江の尼港へ龜田丸を派遣し、幕府は文久二年及元治元年の二回に互つて千歳丸及健順丸を上海へ送つて出貿易を行つた。⁴⁾その第二回目の健順丸による上海貿易は、最初の計畫では英領香港及蘭領バタビアへ出掛けるつもりで、それぞれ英國公使及和蘭總領事に對し萬事斡旋を乞ふ旨の依頼狀を

2) 拙著、増訂幕末の新政策參照。

3) 日本海防史料叢書、第五卷、250頁。

4) 大日本古文書・幕末外國關係文書之二、256頁。

5) 拙著、増訂幕末の新政策、439頁以下。

出してゐる有様であつて、上海よりは遙か南方へ出掛ける計畫であつたのである。

尙この千歳丸による第一回の上海への出貿易のときは恰も長髪賊の亂があつたときで、上海で英佛の兵士が市中の城門を守り、支那人には門を通行せしめず西洋人と見れば則ち門を開いて通行せしめてゐる如き狀況を目撃し『西洋人の勢盛なること爲唐人可憐、支那之衰微押て可知』『實に上海の地は支那に屬すと雖、英佛の屬地と謂ふも亦可也』などと當時の旅行記に記されてゐる。既に此時支那は歐洲諸國によつて植民地化されてゐたのであり、之を見た邦人は國力充實の必要を痛切に感じたのであつた。

七 結

言

家光以後の徳川時代は一般に鎖國の時代として知られて居る。然しそれは絶對的のものではなく、長崎の一角を通して西洋事情や文化が我國に傳へられた。鎖國時代とはいひながら西洋事情の研究は行はれ具眼者は海外の事情を知るに力めたものである。北方蝦夷に對する問題は焦眉の急に迫れるものであり、識者の注意は甚だ大なるものがあつたが、南方への關心も亦相當に強く拂はれてゐたことは勿論である。

四川如見の「華夷通商考」の大宛（シチワン）の條下には寛永年間の濱田彌兵衛の事件を記し、交趾の條下には『昔日本人此國に渡海の時、留つて居住せし者多し。日本町と號して一町ありて其子孫有之由』と記してゐる。又或は東埔寨の條下に『日本にて唐渡りと號して長崎より渡海せしは皆東京・交趾・東埔寨・暹羅に行て、唐土中華に往しには非ず。其渡海の船を御朱印舟と號せしも、公儀より免許の御朱印を申賜て渡海せし故也。其船主京堺長崎の町人也』と記し、又各地についてその土産を掲記せる如き、何れもわが國民の海外發展に關心を有せることの少く

6) 同上、422頁以下。

7) 同上、455—456頁。

1) 日本經濟叢書、第五卷、254、256、260頁。

なかつたことを示すものといふことが出来る。

西力東漸と共に安政以後に於ては我國は國を開いて外國と通交するに至つた。これがため海外の事情は一層詳細に局に當れる者の知る所となり、我國力の充實發展を期するためには積極的進取的なる幾多の政策を必要とした。これ幕末に庶政の一大革新が行はれた所以であり、北方と共に南方への出貿易が行はれ、假令計畫だけに止つたとしても、香港・バタビア迄へも貿易し海外事情を探究せんとした如きは南方に對し重大なる關心を拂つてゐた證左とするに足るであらう。

之を要するに以上列舉した諸種の事實や論策は、鎖國時代以後に於ても、識者の南方に對する關心が決して鮮少に非ざりしことを示すものといはなければならぬ。尤鎖國は我國民の海外發展を阻害した點が少くないが、鎖國の一般的功罪はこの一事のみより論すべきものではなく、その全般を叩いて論斷すべく、それは自ら別個の問題であることはいふを俟たない所である。

明治維新以後開國進取の國是が確立し南進論は明治の前半期に於て既に盛んに唱へられ、明治二十年代は實に南方發展の論策華かなりし時ともいふべきであるが、北方に對する經營が一日を忽にする能はざる狀態にありしため、南方を顧る餘裕がなかつた。然し既に明治七年には臺灣征討、日清戦後の臺灣領有があり、第一次世界戦争による南洋群島の委任統治以來、我國の南方經營は漸く進み來り、遂に今次の大東亞戦争によつて、世界歴史を轉換する一大偉業が着々その成果を收めつゝある次第である。